2024年（令和6年）
第72号
（5月1日）

平安だより

HEIAN letter

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　澤村悦玄
編集委員長：渉外広報　植田恭司
〒605-0041　京都市東山区三条東町 230
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

今月のことば　～柔和な人の、心は自由～　宇治支部主任　堀口陽世

佼成５月号の『今月のことば』のお役を頂きました。宇治支部の堀口です。よろしくお願い致します。

前段で会長先生は『柔和は牛の軛(くびき)を離すこと』という釈尊のお言葉を引用されています。柔和という言葉は、耳にしていますが、軛を離すこととはどういう事だろうと疑問に思いました。するとその後『田を耕す牛に装着した軛という装具を、農作業を終えて牛の体から外すときに萌すのは、牛に対する『きょうもよく働いてくれたなぁ。ありがとう』という感謝といたわりの気持ちに違いありません」と教えて頂いています。ネットの画像で、軛を着けた牛の写真を見て、やっと言葉の意味がわかりました。何だかとても辛そうでかわいそうに思いました。人間のために重労働をしてくれたそんな牛に煩わしい軛を外し、感謝といたわりの心を持つ、優しい心が柔和なのだなと教えて頂き、心が温かくなりました。

会長先生は「牛は大切な家族でした」とおっしゃっていますが、私にも大切な大切な家族の一員である、わんこがいます。かわいくてかわいくてたまりません。そんなわんこに対して温かい気持ちを持つことが、柔和の心なのだと私なりに考えました。これなら実践できそうです。

後段で会長先生は、「軛を離す」ということは、心のとらわれから離れることと教えて頂いています。さらには、とらわれから離れるとは、あれが好きとか嫌いとか、あれこれと自分の思いにとらわれないことと具体的に教えて頂いています。私の友達に、Ａさんという人がいます。Ａさんとは以前からお付き合いがあり、色々と親しくしておりました。Ａさんの友達にＢさんという人がいます。私はＢさんとはお会いした事も無く、お話した事もありませんでした。Ｂさんの事はいつもＡさんから色々と聞いており、自分なりにＢさんの長所や短所を頭の中で描き「きっとこういう方なんだろうなぁ」と思っていました。ところが今年になって、Ｂさんとお会いできる機会があり、色々なお話ができるようになりました。するとＢさんは、私が頭で描いていたＢさんとは全く違いました。勝手に決めつけていたＢさんの短所などどこにもありませんでした。先入観や自分勝手な決めつけを持たず、「自分の思いにとらわれない」ことの大切さを学ばせて頂きました。とは言え、ふたりの人に同じようなことを言われたとしても、この人なら大丈夫だけれど、あの人には、イラッとするという好き嫌いのある私です。

そんな私にも会長先生は最後に「開祖さまは柔和について『はじめは形だけのニコニコ主義でもかまいません。しいて柔和を心がけていれば、自然とそれが精神に溶けこんでしまう』と述べています」と励ましてくださっています。

何かと不都合なことに出会いますが、自分の心が動く前に一旦立ち止まり、柔和な人になりたいと念じながら、できる限りニコニコ顔でいたいと思います。

合掌

タケノコ掘り　～笑顔で汗を流した　中央支部～

中央支部は毎年恒例のタケノコ掘りを４月 14 日に行い、16 名の参加がありました。

朝から晴天に恵まれたこの日、会員が所有しているタケノコ畑に集合した参加者は、掘り方の指南を受けた後、思い思いの場所で悪戦苦闘しながらも楽しく掘り起こすことが出来ました。

ほんの一週間前には何も出ていなかったのに、このところの春の暖かさに、一斉に伸びてきました。早く採らないとすぐ成長してしまうので、約 90 分でほとんどのタケノコを掘り出しました。

その後、西山運動公園で楽しく昼食を頂き、『来年もまたしようね』と語り合いました。手に余るほどの新鮮なタケノコを持ち帰り、教会のお供えに、会員や知人、近所の方におすそ分け、そして、夕飯の供として食卓を飾ったことでしょう。

京都・祇園祭ボランティア21　40周年記念行事

４月21日、京都・祇園祭ボランティア21は40周年の記念行事を八坂神社常盤神殿で行ない、八坂神社野村宮司をはじめ、古川京都府副知事、松井京都市長、公益財団法人祇園祭山鉾連合会の木村理事長の列席のもと、各山鉾町の責任者ならびに同ボランティア加盟団体の責任者や実務者が集いました。

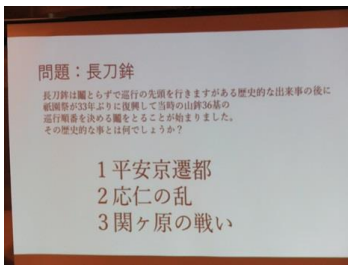
当会青年部も「立正佼成会京都教会青年部」として設立当初から加盟団体となり、永年お祭りを支えながら青年部育成に取り組んできました。今回、京都教会からは東教会長と青年部代表者が参加しました。

はじめに同ボランティア会長の挨拶で「皆さまのお陰で40年を迎えることが出来ました」と感謝の気持ちを表すとともに、「本日の式典も手作り感あふれます」と述べると会場は和やかな雰囲気に包まれました。
祝辞は副知事、市長、八坂神社宮司、山鉾連合会理事長が述べ、花を添えました。

その後、野村宮司から「疫病を鎮めるための祇園神と祇園社と祇園会の祭祀構造」と題した講話があり、「疫病を鎮めるために始まったお祭りが、コロナという疫病によって巡行が中止になりましたが、今後も間違った方向に行ってはならない」と述べ、ここ2～3年の様子を振り返りました。また、京都には多くの神さまがおられることや全国に祇園祭が広まったことなどを解説しました。

会食をしながら加盟団体の紹介やテーブル対抗祇園祭クイズ大会では大いに盛り上がり、拍手や歓声が上がりました。

閉会の挨拶には同ボランティア副会長が立ち、「今年も歴史あるお祭りの陰役として務めていきたい」と抱負を述べました。最後に参加者全員で記念写真を撮り、和やかなままお開きとなりました。



諸国客衆商売繁昌　祈年祭　～お客さまとともに栄える願いを込めて～

諸国客衆商売繁昌の祈年祭が４月20日、法座席で行なわれ、社業発展を願う社員や関係者が集まりました。９時に開式した式典は、陀羅尼品も含めた読経供養から始まり、東教会長のお言葉と続きました。

読経供養の中で導師が申し込みのあった154社の社名を１社ずつ丁寧に読み上げました。

東教会長はお言葉の中で、「諸国客衆」の意味や「繁昌」の文字についてふれました。「諸国」は世界中の会社さまと共にということ、「客集」はお客さまを称える言葉であるということ、そして「繁盛」ではなく「繁昌」にしたのは、儲けてやろうということだけではなく多くの人が訪れて栄えてもらいたいとの願いが込められていると説明しました。続いて、会社といっても一人ひとりの社員の精進に尽きるとし、私たちは仏さまの教えを頂いていると述べたうえで、庭野会長の法話を紹介。即是道場で自分が置かれているところが修行場所であると認識しながら、１つ目は「自らを高め、輝かせること。その場で仏さまの教えを生かし実践していく。自分が輝いていく」、２つ目は「自分が輝けば相手を照らす。万灯のように取引先を照らしていく」の２点を強調されました。

庭野開祖の「一隅を照らすとは、自分の巡り合っている仕事に誠心誠意打ち込み、役目を果たしていくこと。その人の放つ光は人を救い、世の中を照らしていく」というご法話も紹介し、参加者に自ら高みを目指して精進していくことの大切さを促されました。